モーセの母　　出エジプト記２章１～１０節

イエス様の誕生の時もそうでした。モーセの誕生の時も、サタンは働きました。サタンはイエス様を殺そうとしたように今、モーセも殺そうとしています。
サタンはエジプトの王ファラオを通して、徹底的にそのことを実行しようとしました。

（１：15～21 節）しかし神様は、神様を愛し恐れていた助産婦たちによって、その悪い働きを防ぎました。その様な時にモーセが誕生したのです。でも状況はますます悪くなって行きました。ファラオは（22 節）「生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならない。・・」との命令を出しました。

2：1、2 節「さて、レビの家のある人がレビ人の娘を妻に迎えた。彼女は身ごもって男の子を生み、その子がかわいいのを見て、三か月間その子を隠しておいた。」
神様を恐れていた男の子の母は、王の命令をも恐れず、王から三か月間男の子を隠して守りました。男の子の上には、もうかなり大きくなっているミリアムとアロンがいました。ミリアムはもうお手伝いも出来る年ごろ、アロンはまだ 3 歳。みんなで相談して神様に祈りながら赤ちゃんを隠そうとしました。でも元気な赤ちゃんは大きな声で泣くのです。声は隠すことは出来ませんね。そんな時はどうしたのでしょうか？赤ちゃんに負けず、ミリアム、アロンが大声で歌いました。賑やかな家族の様に思われたことでしょう。でもそれは本当に辛い毎日でした。人間の力には限界があります。とうとう隠し切れない時が来てしまいました。それでも、何とかしてこの子を救いたい。母親は祈ったことでしょう。

―――神様に明け渡された赤ちゃん　―――

（3 節、読む）　そんな中で彼女が示されたこと、それは我が子を神様に明け渡す事でした。
彼女は、自分よりももっと確実で間違いのないお方、神様にお任せすることにしたのです。
母親は男の子をナイル川に流すことにしました。兵士によって投げ込まれるよりは自分たちでもっと良いやり方で・・・、というわけでパピルスで編んだかごの裏表に防水加工（沈まない様にアスファルトや樹脂を塗る）をしました。母の愛にすき間はありません。何かあのノアが箱舟を造っている光景をおもいだします。彼女は完成したかごに、赤ちゃんを入れて、ふたをしてそっとナイル川に浮かべました。

―――　川の流れの様に　―――

（4、5 節、読む）かごの中の男の子は、その後どうなったのでしょう。川の流れは、かごを宮殿の近くにとどまらせました。そのかごを少し離れたところで、姉のミリアムはしっかりと見守っていました。ちょうどそこに、ファラオの娘が侍女を連れて水浴びにやってきました。彼女はかごを見つけて、取って来させて、ふたを開けました。

（6 節、読む）そこには可愛い赤ちゃんがいました。赤ちゃんは泣いていました。その泣き声と可愛らしさに心打たれてファラオの娘は、その子を自分の子どもとして育てることに決め、引き取ることにしました。

いつか、乳児院で働いていた方が言いました。親に捨てられて望まれない状態で生まれてきた子供は、みんなとても可愛い顔立ちだそうです。それで、良い方のところへ引き取られて行くのだそうです。この男の子もとても可愛いかったのしょう。

――― 連携プレー ―――

ファラオの娘がその子を引き取ることにした、その時です。ミリアムが目の前に登場します。（7～9 節、）「その子の姉（ミリアム）はファラオの娘に言った。『私が行って、あなた様にヘブル人の中から乳母を一人呼んで参りましょうか。あなた様に代わって、その子に乳を飲ませるために。』ファラオの娘が『行って来ておくれ』と言ったので、少女は行き、その子の母を呼んで来た。ファラオの娘は母親に言った。『この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私が賃金を払いましょう。』それで彼女はその子を引き取って、乳を飲ませた。」

それにしても、ミリアムは勇気があって機転の利く姉ですね。彼女はファラオの娘が男の子に心奪われている時彼女の目の前にさっと現れて「その子に乳を飲ませる乳母を呼んで参りましょうか」と言って、その子の本物の母親を連れて来たのでした。そういうわけで、母は自分が生んだ子に、続けて自分で乳を飲ませることになりました。「それで彼女はその子を引き取って、乳を飲ませた。」しかもファラオの娘の命令に守られ生活は保証されてその上、王の娘から養育資金までいただいたのです。神様は本当に最善をなされる神様ですね。

それにしても、赤ちゃんが母の手から、神様に明け渡された時、神様は男の子に最も安全な人生を約束されました。まさに母の信仰が、サタンの悪の計画に打ち勝ちました。
「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益になることを、私たちは知っています。」ローマ 8：28 節
それにしても、信仰によって決断し、神様に明け渡すことが、一番安全で確実で、どんなに素晴らしい、神様の御業を引き起こすことになるかを、この箇所は教えてくれるのです。
男の子の母は、手放すことによって、我が子を得たのです。

――― 献児式 ―――

私たちは子供を愛していても、なかなか自分でにぎりしめてしまって、神様に明け渡すことが出来ないものです。教会では赤ちゃんが誕生しますと献児式を行います。でも本当に私たちは我が子を献げているのでしょうか？

――― すべては益に ―――

さて、もう一度今までの流れを確認しましょう。

母は、我が子を神様に明け渡しました。神様はその子をしっかりと母の手から受け取りました。神様は男の子を死から守るためにその小さなかごを守りました。沈まないようにしました。神様はナイル川の流れを変えられました。そしてその子を宮殿の近くまで導きました。そして、茂みの中に留まらせました。ちょうどその時、神様はファラオの娘を川辺に導かれました。彼女はかごを見つけました。彼女がかごのふたを開けた時、神様は男の子を泣かせました。この泣き声は祈りの働きをしました。泣き声は天に届き、ファラオの娘の心に通じました。これらはすべて神様の御業ではないでしょうか。

そしてそれから、おそらく 3 年位は過ぎたでしょうか、その子は乳離れして、ファラオの娘の手に渡されたと思われます。でもこの 3 年間、母は我が子に乳を与えただけではありませんでした。三つ子の魂百までと言いますが、母はこの 3 年間に我が子に真の神様への信仰を教えました。家族のルーツを教えました。そして、明け渡しました。

――― 母の教えと祈り ―――

（10 節、読む）こうしていよいよモーセの誕生です。さてモーセは宮殿の中で、この後 37 年間生活することになります。その 37 年間、彼は将来王様になるためのエジプト帝国の帝王学と太陽神アラーの神の宗教学を宮廷内で徹底的に教え込まれます。　この様にして、彼は 40 歳になるまでに相反する 2 つの文化の中で教育を受けました。3 歳までは母のもとで、40 歳までは宮廷内で・・・。

モーセの母は、この 37 年間は何も出来ません。しかし、母は祈りました。直接手を出すことは出来ませんでしたが、神に祈ることは出来ました。

やがて、大人になるにつれてモーセの心の中で矛盾と葛藤が生じます。そして 40 歳になった時、彼は決断しました。彼はすべての栄華を捨ててヘブル人としての道を選びます。

3 年間の母親の教育が、37 年間のエジプト帝王学より強い影響力をモーセに及ぼしたのです。　母の祈り、母の愛の大きさ、教えられますね。

「信仰によって、モーセは生まれてから三か月の間、両親によって隠されていました。
彼らがその子のかわいいのを見、また、王の命令を恐れなかったからです。
信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、
はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。
彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。
それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。
信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。」　ヘブル 11：23～27 節